

Φ. И. チュツチェフ政治詩試訳(9)

大 矢 温

はじめに

「チュツチェフ政治詩試訳(1)～(8)」に引き続いて六巻本全集をテキストに、チュツチェフの政治思想を分析する上で手がかりになりそうな詩の翻訳を試みる。前回に続き、タラーソフ編集のチュツチェフ著作集『ロシアと西欧』において「哲学詩」として分類されたものを対象に翻訳を進める。前回までで六巻本全集の第一巻所収のものはすべて訳出したので、今回から六巻本全集の第二巻に所収されている詩に取りかかることにしたい。

1) 無題¹⁾

宴は終わった、合唱は止んだ、
アンフォラ
古代壺は空けられ、
バスケットは覆されている、
杯のワインは飲み干されず、
頭には花輪がしおれてている、—
ただ香が焚かれている
人気の絶えた食事のホールに……
宴を終えて、われらは遅く立った—
空に星が輝き、
夜は半ばに達していた……

ああ、せわしない都の上、
屋敷の上、家の上、
騒がしい通りの往来の上
くすんだ紅色に照らされた
眠りを知らない群集の上、—
ああ、これら現世の蠱惑の上に、
気高き天上の極みにて
澄んだ星が輝いていた、
死すべき凡人の眼差しに
無垢な光線で答えながら……

パゴージンが編集する雑誌『モスクワっ子』の検閲の日付から 1849 年末から 1850 年初めの作とされている²⁾。初期のチュツチェフ研究者のプラントは、この詩について「『地上の些事』と題をつけることも可能である」としている³⁾。まさにこの詩において歌われているのは地上の喧噪であるが、それと同時に、それから超然としている天上の星が対比されていることに注目する必要がある。死を運命づけられている地上の人間と夜空に永遠に輝く星の対比である。前回見た「イタリアのヴィラ」⁴⁾、「春」⁵⁾にも通じる、普遍的な運動としての自然と個別的な個人の人生との対比、というモチーフである。

2) 双子⁶⁾

双子がいる — 地上に生まれた人間にとっての
二柱の神、— それは死と眠り、(原文大文字、以下同。)
姉弟なので驚くほど似ている —
姉はより陰気で、弟はより温和だ……

だが、別に二人の双子がいる —

この世により素晴らしき双子はいない——
よりすさまじき陶酔もない、
彼女に没頭した心より……

彼らの結びつきは血縁で、偶然のものではない、
そして宿命の日のみ
自らの解けない秘密によって
彼らはわれらを解放する。

一体誰が感情があふれ、
血がたぎり凍るとき、
知らずにおられようか、あなた方の誘惑を——
自殺と愛よ！

これもパゴージンの『モスクワっ子』に発表された作品。雑誌の検閲が1850年3月なので、1850年初め以前、あるいは1849年の作とされている⁷⁾。創作時期からも「最後の愛」たるエレナ・デニーシエヴァとの道ならぬ愛がモチーフであることは想像に難くない⁸⁾。この愛を貫けば、結果は自殺しかないことの自覚であろう、この詩において「自殺」と「愛」は血縁的に結びついた双子と謳われる。チュッチェフによれば、この結びつきが解けるのは「宿命の日」とされる。チュッチェフにおいてこの「宿命」はほとんど「死」と同義語であるから、ここでも愛の結末は死しかないのである。愛と死、というローマン主義の薫り高い作品である。

それと同時に、この詩の中に「イタリアのヴィラ」と同様のシェリング哲学の影響を見ることも可能であろう。カオスの普遍性の中から「我」を「非我」から定立することによって生まれる人間は、愛によって我彼の区別を失うと、必然的に元の普遍性＝無に帰る、つまり死ぬことになるのではなかろうか。その意味で「愛」は「死」なのである。

3) 無題⁹⁾

理屈をこねるな、あせくせするな —
無分別が探求し — 愚考が裁く；
古傷を眠りで癒せ、
しからば明日は何者にかに — なるだろう……
生きながらすべて耐えぬくを得よ：
悲しみと楽しみ、そして不安を —
何を望むべきか？ 何を嘆くべきか？
今日一日生き延びた — お蔭様で！

チュッチェフに宛てた式部官ボルフ男爵夫妻の昼食への招待状に書かれたもの。招待状の日付から 1850 年 7 月初めの作とされている¹⁰⁾。理性や人為の無力というおなじみのテーマを読み取ることもできるが、それが風刺的な色彩を帯びているようにも感じられる。ボルフ男爵とチュッチェフの関係が解釈の鍵になりそうである。

4) 無題¹¹⁾

さあ、神よ、御身が慰めを
夏の暑さと酷暑の中を、
貧しい乞食のように、庭園を避けて、
硬い舗装路をさまよう者に；

眺めている者に — 柵の向こうから —
木々の陰、谷の草木を、
豊かな、明るい牧草地の

手の届きがたい涼気を。

彼のために客を誘う木陰となって
木々は繁茂したのではない——
彼のために、雲霞のごとくに、
噴水は空中に漂うのではない。

瑠璃色の岩屋は、霧の中から、
何とむなしく招くのだろう、彼の眼差しを
それでいて噴水のしっとりとした飛沫は
彼の頭を包まない……

さあ、神よ、御身が慰めを
人生の小道を
貧しい乞食のように——庭園を避けて——
酷暑の舗装路をさまよう者に。

「1850年7月」の日付があることから1850年7月の作であることは確実であろう¹²⁾。うら若いエレナ・デニーシエヴァとの交際が本格化する時期である。それにもかかわらず作者チュツチェフは、「貧しい乞食のように」さまよい、神に慰めを求めている¹³⁾。心地のよい楽園から疎外されているのだ。

チュツチェフの詩作における楽園というテーマに関しては、「海の夢」¹⁴⁾や「イタリアのヴィラ」¹⁵⁾に楽園の情景が描かれている。だが、この詩において、楽園は作者の手の届かないところにある。作者がそこを訪れる「海の夢」や「イタリアのヴィラ」における楽園の情景とは対照的である。「海の夢」と「イタリアのヴィラ」、両者の楽園に共通することは、その楽園が「夢と幻の静かな領域」(「海の夢」、あるいは「眠りについた」状態(「イタリアのヴィラ」、と、どちらもカオス的まどろみの中に描かれていることである。それに対してこの詩に

おいて楽園から疎外されたチュッチェフが立つのは、楽園の外である。あくまでもチュッチェフの立ち位置は現世にあり、醒めているのである。これは社会に背を向けた愛に対する罪の意識だろうか。先行訳がある¹⁶⁾。

5) 無題¹⁷⁾

おお、何と私たちは殺人的に愛すのだろう、
抑えがたい情欲に盲目となったがごとく
私たちはきっと滅ぼすだろう、
私たちの心によりいとしきものを！

ずっと昔のことだっただろうか、己の勝利を誇りつつ、
おまえが言ったのは：彼女は私のものだ……と
まだ一年経っていない——尋ねて知るがよい
彼女の去ったあと、何が残ったか？

両頬のばら色はどこへ行ったか、
口元の微笑みは、瞳の輝きは？
涙はすべてを焦がし、焼き払った
その可燃性の液体で。

おまえは覚えているだろうか、私たちが出会ったとき、
最初の運命的な出会いのとき、
彼女の魔法のような眼差し、そして会話を、
そして無邪気な生き生きとした笑いを？

そして今はどうだ？みなどこだ？
その夢は永遠のものだったのか？

ああ、北国の夏のごとく、
その夢はつかぬ間の客だった！

おまえの愛は彼女にとって、
恐ろしい運命の判決だった
そして不当な恥辱として
それは彼女の人生に横たわった！

絶縁の人生、受難の人生！
彼女の心の奥底で
彼女には思い出が残された……
だが、それらもまた裏切ったのだ。

地上は彼女に荒地となった、
陶酔は去った……
群集が、押し寄せ、中傷した
彼女の心の中で咲き誇ったものを。

灰燼のごとく、長い苦悩から、
何を彼女は守り残したのか？
痛み、激昂のひどい痛みを、
慰めのない、涙のない痛みを！

おお、何と私たちは殺人的に愛すのだろう、
抑えがたい情欲に盲目となったがごとく
私たちはきっと滅ぼすだろう、
私たちの心によりいとしきものを！

1851年3月頃の作と考えられる。デニーシエヴァのスモールヌイ卒業式のためにペテルブルクに彼女の父親がやってきたのが1851年3月なので、その直後と考えるのが妥当であろう¹⁸⁾。そこでチュツチェフとの仲が露見し、デニーシエヴァは勘当状態になる。近親者との面会が禁じられ、スモールヌイ関係者からも疎んじられることになる¹⁹⁾。この詩にある「不当な恥辱」、「群衆」の「中傷」とはこの事件と無縁ではない。

詩の構造としては、本質的にチュツチェフの自問自答である。現在のチュツチェフが過去のチュツチェフに問いただす構造である²⁰⁾。したがって1行目の「私たちは」——「愛する」、における「私たち」とはデニーシエヴァとチュツチェフのことではなく、過去のチュツチェフと現在のチュツチェフのことであると解すべきだ。過去のチュツチェフと現在のチュツチェフ、二人のチュツチェフがデニーシエヴァを愛しているのだ。しかもその愛は彼女を破滅させる「殺人的」な愛なのである。

6) 無題²¹⁾

私は知らない、天の恵みが及ぶだろうか
私の病的で罪深い心に、
それは復活し立ち上がれるだろうか、
精神的な孤児状態は治るだろうか？

だがもし心がここで、地上で
平安を見出せるのなら、
おまえは私にとっての天恵だった——
おまえ、おまえ、私の地上の神よ！……

二番目の妻、エルネスチーナに宛てたもの。彼女の死後、1875年に彼女の植物標本アルバムから発見された。ともに発見された別の詩の日付から1851年4

月の作とされている²²⁾。デニーシエヴァを「殺人的に」愛する一方でチュツチェフはこの詩においてエルネスチーナに救いを求めている。デニーシエヴァとの「殺人的な」愛の結果としての八方ふさがりの状況からの救いを妻のエルネスチーナに求めているのである。

この時代のチュツチェフの思想的な課題がロシアと西欧の問題であったことを考慮するなら、ロシア語をよく解さずカトリック信仰に留まったエルネスチーナがチュツチェフの中で西欧を代弁したのに対し、デニーシエヴァの中にチュツチェフはロシアを求めている、とする説明も説得的である²³⁾。

7) 波と思い²⁴⁾

思いました思い、波また波——

自然のこの二つの現象は同じ：

狭い心の中であろうか、果てしない海の中であろうか——

ここは——閉ざされ、彼の方は——広大無碍、

すべては同じ永久の寄せ波と引き波——

すべては同じ不安で空虚なまぼろし。

海を見ながら物思いにふけっているのであろうか、悲観的な雰囲気に含まれた詩である。1851年7月14日の作とされている²⁵⁾。この時期、チュツチェフは彼の娘、ダリヤとエカテリーナの学業継続についてスモーリヌイ側から難色を示されていた。デニーシエヴァとの事件が原因である。妻のエルネスチーナへの釈明も必要だった。デニーシエヴァとチュツチェフ、二人を取り巻く世間の目も厳しいものがあつたに違いない。

このような絶望的な状況を反映しているのであろう、この詩においては、生命の源であるはずの海のカオスは何物も生み出さない。無為に「永久の寄せ波と引き波」が繰り返すばかりである。波と「同じ」とされる「思い」もまた、「すべては同じ不安で空虚なまぼろし」となつて何物も生み出さない。事態を打

開する妙案は浮かばないのである。

8) 無題²⁶⁾

別れ住むことには高い意義がある：

どんなに愛していても、一日であろうと一世紀であろうと……

愛は夢、夢は——一瞬、

遅かれ早かれ目覚めが、——

人はついには目覚めねばならない……

1851年8月の作とされている²⁷⁾。チュツチェフがデニーシエヴァとの愛の恍惚から醒め、現実の世界に引き戻された様子がかがえる。すでに「2) 双子」で見してきたように、チュツチェフにとって「死」と「眠り」=夢、「愛」と「死」はたがいに共通する概念だった。この詩においても「愛は夢」と謳うことによって「死・眠り・愛」の三位一体を確認している。そして上述の「4) 無題（さあ、神よ、御身が慰めを）」で解釈したとおり、彼にとって楽園的調和はこれらのカオス的狀態の中でのみ可能であった。しかし、チュツチェフによれば人間は自我によってカオスにから自己を定立する。この詩においても彼は「人は最後には目覚めなければならない」と結んでいる。楽園を追われ、地上に生きる人間の原罪の意識といえるかもしれない²⁸⁾。

9) 無題²⁹⁾

慈悲深い神により

臆病な小鳥が創られたのも無為ではない——

真の救いの証として

小鳥には敏感な小心さが与えられた。

哀れな小鳥にとって得はない
人との、人の家族との縁組みに……
それに近づけばそれだけ、宿命に近づくのだ——
人々の手の元で不幸に会う宿命に……

ほらやっと、女の子が小鳥を育て上げた
最初の羽毛から、巣から、
小鳥をはぐくみ、育て上げた
しかも惜しまなかった、いとわなかった
小鳥のために愛情も、労も。

だが、心を配った愛情をもって、
およえよ、我が娘よ、どんなに小鳥に気を配っても、
日が来る、動かしがたい日が
お前の、不注意な弟子は
お前の手によって死ぬのだ……

ロシア国立文学歴史古文書館にも妻エルネスチーナのアルヒーフが保管されている。その中で彼女が残したチュッチェフの詩のリストからこの詩は 1851 年の作とされている³⁰⁾。チュッチェフ著作集『叙情詩』の編者ピガリョーフは、この詩を、「飼っていたカナリアをうっかり押しつぶしてしまった娘に宛てられたもの」としているが根拠は不明³¹⁾。

10) 宿命³²⁾

愛、愛は——と伝説は伝える——
血の繋がった心と心の結び合い、
それらの化合、結合、

それらの宿命的な融合、
そして……宿命的な決闘——

二人のうち的一方が優しければそれだけ
二つの心の衆寡敵せぬ戦いにおいて、
より不可避で確実に、
愛しながら、苦しみながら、悲しく放心しながら、
ついには困憊してしまう……

1850年代に書かれた「デニーシエヴァ・サイクル」と呼ばれる一連の詩作の中で核心的な作品とされている³³⁾。すでに指摘したように、チュツチェフにおいて「宿命的」という語はほとんど「死」と同義で使われていることから、4行目の「宿命的な融合」とは、上述の「5）無題（おお、何と私たちは殺人的に愛すのだろう）」における「殺人的な愛」に通じる愛の形である。圧倒的に力の差がある「衆寡敵せぬ」「宿命的な決闘」に敗れ、「ついには困憊してしまう」のはデニーシエヴァの側だろうか、それともチュツチェフの側だろうか³⁴⁾。

11) ジュコフスキーの思い出³⁵⁾

I

私は見た君の夕べを。それはすばらしかった！
最後に君と別れながら、
私はそれに見とれた。静かで、そして輝いていた、
すべてを暖気となって貫通する……
おお、何とそれは暖め、輝いたか——
君の、詩人よ、別れの光線は……
とはいえ、すでに明らかに現れた
一番星が彼の夜に……

II

彼には嘘も、分裂もなかった —
彼はすべてを我が身の中に和解させ、両立させた。
なんと心からの寵愛をこめて
彼が私にホメーロスを読んだことか……³⁶⁾
花咲き乱れバラ色だった
若き青年時代は……
一方星はその時代に降り下した
その謎めいて陰気な光を……

III

まったく彼は、鳩のように、清らかで十全だった
精神的に；蛇の智慧を³⁷⁾
軽蔑しなかったが、それを理解することはできた、
が、彼の中で純粋に鳩の精神が吹き寄せた。
そしてその精神的純粋さによって
彼は成人し、強健となり啓蒙した。
彼の精神は様式にまで高められた：
彼はスマートに生き、スマートに歌った……

IV

そしてその精神の高い様式を、
彼の人生が作った、リラを貫く、
その最良の果実として、最良の功績として、
彼は遺贈した波立つ世界に……
世界は彼を理解するか、評価するか？
神によって語られたのは、我らについてではないだろうか：
「ただ心清きもののみが — 神を見る！」³⁸⁾

1852年4月11日に亡くなったB. A. ジュコフスキーの葬儀に参加する途中、1852年6月にオリョールからモスクワへの途上で書かれたとされている³⁹⁾。先立った友に捧げた詩、ということもあって、この作品の中でジュコフスキーは十全で調和の取れた精神を持つ、理想的な人物として描かれている。

12) 無題⁴⁰⁾

ああ、寄る辺なき悲しげな
我らの無知は何だろう？
誰が語れようか：また会うまでと
二・三日の無底を経て？

ペテルブルクのチュツチェフがオーフスツクにいる妻のエルネスチーナに宛てた1854年11月11日付の手紙に添えたもの⁴¹⁾。一日も早く離れて暮らすエルネスチーナに会いたい気持ちが率直に述べられている。チュツチェフにとって時間と空間は克服しがたい障害であった。たった二・三日先のこととはいえ、人間は未来について無知である。未来のことは分からない。現在と未来との間には「無底」が横たわっているのである。

13) 無題⁴²⁾

如此、人生に瞬間あり —
それを伝えるは難し、
それは忘我の
地上の恵み。
木々の梢はざわめく
私の頭上高く。
天上の鳥だけが

私と語り合う。

すべて俗悪で虚偽なものは

かくも遠くに去り、

すべて愛しく有り難きものは

かくも近くしかも易し。

私にとって心地よきものも、甘美なものも、

そして平安も私の胸の中にあり、

私はまどろみに包まれている —

おお、時よ、停まれ！

1855年7月の作とされている⁴³⁾。たとえ「瞬間」といえど、人生にこのような調和的な楽園が訪れるのだ。ここでもチュッチェフの「楽園」は「忘我の」「まどろみ」のなかに実現している。とはいえ、この時期、政治的にはクリミア戦争の敗戦がいよいよ決定的となり、チュッチェフ自身、とてもこのような心境に甘んじている余裕はないはずである⁴⁴⁾。一般に1855年7月は、ますます悪化する戦況と呼応してチュッチェフの政府批判が先鋭化する時期である。状況的にこの詩作の時期をチュッチェフがペテルブルクで過ごしていた7月とすることには疑問が残る。むしろそのような緊迫したペテルブルクを離れて家族とオーフスツクで過ごした1855年8月の方がこの詩の創作時期としてはふさわしいように思われる。

14) ミケランジェロから⁴⁵⁾

黙ってくれ、頼むから — あえて私を起こさないでくれ —

おお、この時代に — 犯罪的で破廉恥な —

生きず、感じずにいることは — それはうらやましき幸運 —

眠るは喜び、石となるは — さらなる喜び。

ミケランジェロの詩を訳したもの。最初、1830年代にフランス語に訳し、このロシア語訳は1855年のものとされている⁴⁶⁾。クリミア戦争によってロシアが、そしてデニーエヴァとの関係でチュッチェフ自身が窮地に陥っていたこの時期、彼の心の琴線にミケランジェロのこの詩が触れたに違いない。ここにおいてもチュッチェフは「我」を去った眠りの中、「石となる」ことに平安を見出している。

15) 気休め⁴⁷⁾

私たちが、我らのものと言ったあの時は、
永久に私たちから去った —
そして、墓石の下のように
私たちに重苦しいものとなった、—

行こう、そしてちょっと見てみよう
水の流れに沿って、
まっしぐらに流れが急ぐところを、
奔流が運ぶところを。

相次いで先を争って
流れは急ぐ、走る
何者かの宿命的な呼びかけが、
彼らには遠く聞こえる……

その後をあてなく我らは追う —
それは後には戻れない……
だが我らが遠くにさまよえばそれだけ、
呼吸はより軽くなる……

涙が目からぼろぼろ出た —
涙の向こうに我らは見る、
すべてが、波打ち沸き上がりながら、
より早く運び去られる様を……

魂は忘却に陥り、
そして感じる、
魂もまた運び去ることを
全能の波が。

N. Lenau のドイツ語の詩を自由翻訳したもの。1858年8月の作とされている⁴⁸⁾。第一聯ではデニーシエヴァとの経緯がほのめかされ、その「重苦しい」状態からの脱出が第二聯以降に続く。三聯目で「宿命的な呼びかけ」が「聞こえる」としているが、これはすでに指摘したように、死を運命づけられている人間の行く末であろう。五聯目、六聯目に「波」が出てくるが、これは自然の営みである。「魂が忘却に陥り」自然の営みと一体化した時、現世の苦しみから人間は解放されるのである。

16) ヤーコブ・ベームから⁴⁹⁾

時と永遠を
自らの中に両立する人は、
すべての悲しみから
自らを防いだ。

反動政治家として知られる J. H. ブルードフの依頼に応じてヤーコブ・ベームの句を訳したもの⁵⁰⁾。ブルードフは1864年2月に没しているので、それまでの作と考えられる⁵¹⁾。ミュンヘン時代のチュッチェフの思想にはシェリング哲

学の影響が認められるが、シェリング自身、同一哲学に見られるようにペーメの影響を受けているので、チュツチェフがシェリング経由でペーメに関心をもったものと思われるが、18世紀末にはペーメがロシアで広く知られていた、という指摘もあるので⁵²⁾、ミュンヘンに発つ前にチュツチェフがロシアでペーメを学んだ可能性も排除できない。

むすび

今回から六巻本全集の第二巻に収められている詩に取りかかったが、フランス語で書かれた「アンネンコフ婦人に」⁵³⁾は訳出できなかった。おもに1850年代の作品を訳したが、この時代は、クリミア戦争の影響を受けてチュツチェフの政治思想の発展において一つの画期となったが、同時に私生活でも試練の時期となった。ロシアと西欧の対立を軸とする政治思想を鍛えながら、それと同時にチュツチェフは、地上の現実の苦悩から逃れる楽園を希求していたのであった。

注

- 1) *Тютчев Ф. И.* «*** (Кончен пир...)» // Полное собрание сочинений и письма в шести томах. М., 2002—2004 (далее “Тютчев”). Т. 2. С. 10.
- 2) См. “Комментария” // Тютчев. Т. 2. С. 341.
- 3) Брандт Р. Ф. Материалы для исследования «Федор Иванович Тютчев и его поэзия» // Известия отделения русского языка и словесности императорской академии наук. С—Пб., 1912. Т. 16. Кн. 2. С. 186.
- 4) 拙稿「Ф. И. チュツチェフ政治詩試訳(8)」、『文化と言語』第71号、2009年11月、78-79頁参照。
- 5) 同上、80頁参照。
- 6) «Близнецы» // Тютчев. Т. 2. С. 13.

- 7) См. “Комментария” // Тютчев. Т. 2. С. 345.
- 8) チュツチェフの伝記作家のコジノフは「最後の愛」が始まる時期を 1850 年としている。См. *Кожнов В. В.* Пророк в своем отечестве. М., 2001. С. 255.
- 9) «*** (Не рассуждай, не хлопочи...)» // Тютчев. Т. 2. С. 18.
- 10) См. “Комментария” // Там же. С. 352.
- 11) «*** (Пошли, Господи...)» // Там же. С. 19.
- 12) См. “Комментария” // Там же. С. 353.
- 13) 在外公館時代のチュツチェフは出張旅費を節約するためにしばしば徒歩で旅をしていた。См. *Экштут С. А.* Тютчев: Тайный советник и камергер. М., 2003. С. 66–67.あるいはこの時の経験が彼の中で蘇ったのかもしれない。
- 14) 拙稿「Ф. И. チュツチェフ政治詩試訳(7)」、『文化と言語』第 70 号、2009 年 3 月、105 頁参照。
- 15) 拙稿「Ф. И. チュツチェフ政治詩試訳(8)」、『文化と言語』第 71 号、2009 年 11 月、78-79 頁参照。
- 16) 坂庭敦史、早稲田大学大学院文学研究科博士論文『フォードル・チュツチェフ研究』、2004 年、158-159 頁参照。
- 17) «*** (О, как убийственно мы любим...)» // Тютчев. Т. 2. С. 35–36.
- 18) 全集の編集者も 1851 年初めの作としている。См. “Комментария” // Там же. С. 371.
- 19) См. Из воспоминаний А. И. Георгиевского // Литературное наследство. Т. 97. Кн.2.С. 110.
- 20) 坂庭氏はチュツチェフにおける「分裂の抑制」というテーマにおいてこの詩を分析し、第一聯と最終聯の「私たち」を「過去、現在の二人の私よりはひとつの人称代名詞 мы のなかに収められている」としてこの「我ら」мы をチュツチェフ自身として解釈している。坂庭、前掲書、149-150 頁参照。
- 21) «*** (Не знаю я...)» // Тютчев. Т. 2. С. 37.

- 22) См. “Комментария” // Там же. С. 372.
- 23) このチュツチェフの「二重恋愛」についての事情を伝記作家のコジノフは「エルネスチーナ・プフェッフエリとエレナ・デニーシエヴァはお互い、ヨーロッパとロシアにおとらず異なっていた」からと説明している。*Кожнов*. Указ. соч. С. 305.
- 24) «Волна и дума» // Там же. С. 41.
- 25) См. “Комментария” // Там же. С. 376.
- 26) «*** (В разлуке есть...)» // Там же. С. 44.
- 27) См. “Комментария” // Там же. С. 379.
- 28) 先行訳について坂庭、前掲書、138頁参照。
- 29) «*** (Недаром милосердым Богом...)» // Тютчев. Т. 2. С. 48.
- 30) См. “Комментария” // Там же. С. 385.
- 31) См. *Пигарев К. В.* подгот. Лирика. М., 1966. Т. 2. С. 365.
- 32) «Предопределение» // Тютчев. Т. 2. С. 50.
- 33) См. “Комментария” // Там же. С. 387.
- 34) 坂庭氏の先行訳では7行目のВ борьбе неравнойが「つりあわないふたつの心の戦いのなか」となっているが(坂庭前掲書、138-139頁)、多勢に無勢、戦力に歴然とした差がある戦い、という意味でここでは「衆寡敵せぬ戦い」と訳をつけた。「宰相ゴルチャコフ公のポートレートに」(Тютчев. Т. 2. С. 182.)にも現れる表現である。
- 35) «Памяти В. А. Жуковского» // Тютчев. Т. 2. С. 55.
- 36) ちょうど5年前の1847年の7月末から8月初めにかけてチュツチェフはジュコフスキーらとドイツのエムスで過ごしており、その際、ジュコフスキーから彼が訳した「オデッセイ」の朗読を聞いている。См. Письмо Эрн. Ф. Тютчевой от 17/29 августа 1847 г. // Тютчев. Т. 4. С. 428.
- 37) 新約聖書に「へびのように賢く、はとのように素直であれ」という言葉がある。マタイによる福音書10.16。
- 38) 新約聖書に「心の清い人たちは、さいわいである、彼らは神を見るだろう」

という言葉がある。マタイによる福音書 5.8。

- 39) См. “Комментария” // Тютчев. Т. 2. С. 394.
- 40) «*** (Увы, что нашего незнания...)» // Там же. С. 65.
- 41) См. “Комментария” // Там же. С. 403.
- 42) «*** (Так, в жизни есть мгновения...)» // Там же. С. 70.
- 43) См. “Комментария” // Там же. С. 412.
- 44) たとえば7月末には娘宛の手紙で英仏連合艦隊による当時ロシア領だったスウェアボルク (ヘルシンキ沖の要塞スオメンリンナの旧称) 砲撃を伝えている。См. Письмо Е. Ф. Тютчевой от 30 июля 1855г. // Тютчев. Т. 5. С. 217.
- 45) «Из Микеланджело» // Тютчев. Т. 2. С. 76.
- 46) См. “Комментария” // Там же. С. 426—427.
- 47) «Успокоение» // Там же. С. 90.
- 48) См. “Комментария” // Там же. С. 443.
- 49) «Из Якоба Беме» // Там же. С. 100.
- 50) ベーメのドイツ語の原文は См. Литературное наследство. Т. 97. Кн. 1. С. 178.
- 51) См. “Комментария” // Тютчев. Т. 2. С. 445.
- 52) См. Литературное наследство. Там же. С. 179.
- 53) «Е. Н. Анненковой» // Тютчев. Т. 2. С. 87.

(本研究は、科研費 (基礎研究 (B) 21330030) の助成を受けたものである。)